様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年３月３１日現在

機関番号：６２５０１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：２０１０～２０１２
課題番号：２２３２０１７８
研究課題名（和文）　消費社会における民俗と歴史の利用

研究課題名（英文）　Commercialization of folklore and history in the department stores and the tourist industries

研究代表者
常光　徹（TSUNEMITSU TORU）
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：40321541

研究成果の概要（和文）：本研究課題が明らかにしたことの１つ目は，百貨店が各地の民俗や各時代の歴史を商品に取り込み，全国に普及させる機能をもってきたことである。それは郷土玩具や着物，おせちなどの事例によく表れていた。２つ目は，観光産業が自然や近代化遺産の意味を変化させ，それらを観光資源に転換してきたことである。それは，開発と表裏一体であった残された自然をエコツアーに活用し，あるいはかつて再開発の対象であった炭坑跡や戦跡を保存の対象に切り替え，新たな観光資源としていた。

研究成果の概要（英文）：This study mainly clarified two facts. First, the department stores took folklore and history into the goods, and have been spread all over the country. The typical examples are local toys, *kimonos*, *Osechi* (dishes for the New Year), etc. Secondly, the tourist industries changed the meaning of natures and the modernization inheritances, and have converted them into tourist resources. They utilized for the eco-tour the nature left from development, and have changed the sites of the coal mines and the old battlefields which were being redeveloped once to the object of preservation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	6,200,000	1,860,000	8,060,000
2011 年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2012 年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
総　計	14,700,000	4,410,000	19,110,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：消費，民俗，歴史，百貨店，観光，自然，生活，景観

１．研究開始当初の背景

民俗や歴史はそれぞれの地域において形成されてきたものであるが、一方で、その認識や表象が日常生活の中で積極的に利用されてきたことが、近年明らかになっている。こうした利用の有り様を資源として捉え、それらを対象とする研究がみられるようになっている。例えば、科研費特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築－象徴系と生態系の連関をとおして」（代表：内堀基光、平成 14～17 年）によって、資源に対する概念が広がり、その意味が

自明ではないということが明らかにされた。また、科研費基盤研究(B)「文化政策・伝統文化産業とフォークロリズムー『民俗文化』活用と地域おこしの諸問題」（代表：岩本通弥、平成13～15年）では、地域おこしに「民俗文化」が活用されている実態と問題性に迫った。

なかでも、民俗芸能については、多くの既存研究でイベント化の実態が指摘され、保存の一方で、それを観光化する動向について検討がなされている（小松和彦編『祭りとイベント』小学館、1997；内田忠賢「都市の新しい祭りと民俗学ー高知『よさこい祭り』を手掛かりにー」日本民俗学 220、1999 など)。だが、芸能以外では、文化の大衆消費化に関する研究蓄積が乏しく、世界遺産をはじめとする文化財保護について批判的研究が散見されるにとどまっている（才津祐美子「『民俗』の『文化遺産』化をめぐる理念と実践のゆくえ」、日本民俗学247、2006など 。

また、自然利用についても、たとえば林学の既存研究では、白神山地や屋久島を典型として、これまで目を向けられることの少なかった「自然」が世界遺産登録を経て観光スポットとなり、自然知や自然利用といった民俗知識がツアーガイドの体験メニューに転換されていることを指摘している（深見・坂田・柴崎ほか「屋久島における滞在型エコツーリズムー地域住民との連携を主軸とした確立可能性ー」、島嶼研究4、2003など)。これに対して、従来の民俗学では、文化財保護の対象が自然に拡大しつつある現状とその背景、またその影響を開発との関連や地域生活との関わりから捉えようとする点についての検討が不十分であった。自然はあるがままの存在でなく、とくに観光目的で新たな価値を付与され、利用される。民俗学の文化財保護と観光に関する研究でも、自然を含めた総合的な視点から分析する必要性がある。

さらに、都市の日常生活に目を向けても、正月や節供といった年中行事、結婚や葬儀、七五三、出産などの人生儀礼など、これまで民俗と捉えられてきたものが、実は近代以降に百貨店やブライダル産業、葬儀社など専門の業者によって、さまざまな商品やサービスとして提供されている実態に対し、それを扱った研究はごくわずかにとどまっている（神野由紀『趣味の誕生　百貨店がつくったテイスト』勁草書房、1994年；山田慎也『現代日本の死と葬儀』東京大学出版会、2007年など)。これに対して本研究では、歴史学や経済学との協業により、都市の日常生活が「民俗」と「歴史」の装いのなか、商業主義に絡めとられていく実態を調査するとともに、それを生み出す社会・経済的背景を明らかにして、それらの理論的統合化を図る。

以上、本研究が重点をおくのは、日常で大規模におこなわれている「都市の消費生活」と「地方文化の商品化」における「民俗」・「歴史」の利用の問題である。上記で触れた、都市生活における年中行事や人生儀礼の産業化などのほか、自然知や自然利用といった民俗知識の観光利用やそれに伴う生業変化を対象とし、「民俗」と「歴史」が日常・非日常のあらゆる場面で利用されている実態とそれを生みだす社会的・経済的システムを明らかにする。

２．研究の目的

近代以降，消費文化は日常の家族生活から通過儀礼，年中行事，祭礼・イベント，エコツアーにまで浸透し，「民俗」と「歴史」は，伝統的な装いのもとに新たな価値を見出され，需要を喚起する役割を果たしている。このような状況に対し，本研究は民俗学を基軸としつつ，歴史学や経済学の視点や分析手法を取り込んで，「民俗」と「歴史」の大衆消

費化の過程とそれを生み出す社会的・経済的背景を解明するものである。とくに以下の二点を中心に研究を進めていく。

（１）　百貨店における商品開発の過程で創出される歴史表象を分析し，さらに当時の学問が正統性を与えるなど，その関与の様相を解明する。さらに，商品の地方への浸透とそれを用いた儀礼や家族生活の検証により，中央の百貨店から提示された理想的な家族像・地域像を，地方や各家庭がどのように受容し，新たな民俗を形成していったのか明らかにする。一方，地方での「工芸」や「民芸」，「土産品」の分析を通して，地方文化の都市受容を考察する。これにより「民俗」と「歴史」の商品化の動向を都市と地方の双方向について一体的に把握する。

（２）　文化と自然を観光資源として用いる場合には，従来の経済原理とは異なる，価値観の転換がなされる。その転換がどのような経緯で行われ，かつ住民生活にどのような影響を及ぼすのか，現地調査を中心とした分析を行う。とくに地域開発に伴って文化の保存措置が図られる例や農林水産業や炭鉱業の衰退に伴う地域経済の停滞から，自然と文化を観光開発に利用する道を選ぶ事例など数多く見られる。これらの価値付けには，しばしば文化行政が関与している。そこで本研究では，文化と自然に対する価値観の変化を，観光に対する地域の意見対立や拮抗といった当事者の視点と，そこを訪れる観光客，開発資本，文化行政といった外部からの視点を含め総合的に捉える。

３．研究の方法

本研究では、個別具体的な調査をおこなうため、研究組織を調査対象別にＡ班（都市の消費生活）、Ｂ班（地方文化の商品化）の２つに分ける。そして、その成果をプロジェクト全体で共有するため、２班で合同の研究会をおこない、そこで議論した結果を各班による次の調査に反映させる方法を繰り返して総括へと進んでいく。

Ａ班（都市の消費生活）

Ａ班では、まず岩淵（近世史）が三越百貨店を中心として、大手百貨店が近代以降の商品開発に元禄模様を典型とした江戸趣味をどのように取り込み、「伝統」を流行に転換したのか明らかにする。神野（デザイン史）は、そこでつくられた流行の歴史的変化とその要因をおもにデザインの面から取り上げ、それがどのように家族生活へと取り込まれ、家族そのもののあり方を変えていったのか分析する。小池（民俗学）は正月や盆行事などの年中行事を、また山田（民俗学）は結婚式や葬式などの通過儀礼をそれぞれおもな事例として、それらが画一的な商品パッケージによって代替されつつも、一方で「伝統性」を付与される中、家族とその消費文化がどのように変化していったのか明らかにする。

百貨店で創出・普及された都市の消費文化は、地方に普及して全国画一化される。その中で、おせちや七五三のように、地域色を持った正月料理や子供の祝いが変質し、新たな全国的「民俗」として生成されていくものがある。このような消費文化の普及過程で生じた「民俗」の変質ついては、山田が分析を担当する。

また、工芸品と土産品は、商品化の過程で本来の地域性が捨象されていく一方で、新たに記号化・キャラクター化された地域イメージが付与されたものであるため、Ｂ班の「地方文化の商品化」とも強く関わっている。したがって、アンテナショップや物産展、物産市におけるこれらの調査においては、メンバー全員がそれぞれ担当する対象地域で調査をおこなう。

Ｂ班（地方文化の商品化）

Ｂ班では、まず常光（民俗学/口承文芸）がおもに遠野と佐賀平野を事例として、河童伝承を中心とした民話による地域おこしの調査をおこない、観光化による民話の変容と受容について検討する。次に、内田（民俗学）が北海道と沖縄をおもな対象として、観光開発における文化と自然の発見・創出、および保存・利用に至る過程の解明を行う。反対に、観光目的で文化と自然を保存・利用することが皮肉にも開発へとつながり、地域社会を大きく変化させていくことについては、柴崎（環境経済学/観光学）が屋久島と白神山地をおもな事例として調査を進めていく。また、青木（民俗学／地理学）は九州地方と五箇山・白川郷をおもな事例として、産業遺産が価値変化を伴いながら地域独自の文化として受容されていく過程を分析する。

４．研究成果

〇2010 年度

Ａ班（都市の消費生活）

Ａ班ではまず，株式会社三越に所蔵されている「花ごろも」，「夏衣」，「春模様」，「氷面鏡」，「みやこふり」，「時好」，「三越タイムス」といった近代のＰＲ誌を全頁撮影し，そのデータを研究代表者と分担者全員で共有した。また，消費文化の歴史的展開を明らかにするため，三越とその他の百貨店，スーパーマーケットの社史や社内報，ＰＲ誌，営業案内などを収集し，研究会全体の基礎データとした。

また，昭和に入ってから消費に占める女性の役割が大きくなるため，その潮流を形成した婦人向け雑誌や化粧品・トイレタリー商品・ファッション関連の会社社史，社内報などを収集した。来年度には，それらのデータを整理し，重要な資料について誌面分析をおこなう予定である。

都市の消費生活については，その担い手となる都市と都市近郊の家族形態の変化も重要な点である。これについては，政府統計や企業アンケートの結果などを用いて，家族構成や住居形態，通勤手段，余暇時間の利用法など全体的な流れを押さえることにした。その上で，結婚から葬儀に至るまでの様々な家族生活や人生儀礼が商品化の波に取り込まれていった様子について調査をおこなった。

Ｂ班（地方文化の商品化）

Ｂ班では，屋久島と白神山地の観光業について現地調査をおこなったが，予想以上に観光客が激減している現状を目の辺りにすることとなった。また，屋久島については，屋久杉の商品化について調査をするため，複数の工芸家を訪ね，材料となる土埋木の入手方法や作品の作り方などを教わった。その過程で，より詳細な調査をするため，土埋木や屋久杉工芸品を入手し，博物館に収蔵することとなった。

次に，白神山地を事例として，農業・漁業や土木建築業から観光業へと就業先を大きく方向転換した結果，現在の地域社会にどのような影響が出ているのか緊急に調査した。その結果は，11 月 7 日に八重洲ビジネスセンターで開催された総合研究大学院大学の学術交流フォーラムにおいて，「世界自然遺産の保護と観光化の諸問題」というタイトルで報告した。

アイヌ観光については，アイヌ民族がどのように表象されてきたのかを調査するため，古い絵葉書や写真，学術書などを収集・整理した。とくに絵葉書は大量に発行されていることがわかったが，フィクションと思われるものが少なからず見つかっており，慎重な分析を要することが確認された。

炭鉱業と製鉄業を調査対象の中心とする近代化遺産は，事業活動の変遷や労働者の生活変化，その後の文化合いとしての保護活動

などによって，景観の変化に大きく関わってきた。今年度は，新旧の絵葉書や写真，会社案内，社史，労働組合史などを収集して，景観変化の様子を明らかにしようと試みた。また，九州各地に残されている炭鉱業と製鉄業に関連した資料の所在調査をおこなった結果，高島，宮若，八幡を重点的に分析することにした。

戦跡関連の資料は長崎に多く，沖縄に少ないという特徴があるが，できるだけ第二次世界大戦前後の景観変化とその後の観光化の様子がわかるように，長期的なスパンでの狩猟収集と整理に努めた。また，沖縄の場合は，戦跡の保存が土木開発とも関係しているため，その歴史的推移も意識して調査することとした。

〇2011 年度

Ａ班（都市の消費生活）

Ａ班ではまず，長野県須坂市の田中本家博物館において，昨年度に引き続き三越に関連した文書資料の撮影とスキャニング，モノ資料の撮影と計測をおこなったうえで，それらの整理，目録の作成をおこない，電子データとしてメンバー間で情報を共有できるようにした。また，三越関連の資料を補うことと，他の百貨店やスーパーとの比較分析をおこなうため，各社のＰＲ誌やカタログ，社史，絵葉書の収集をし，分析に取り入れた。

三越と並んで，近代日本に西洋文化を積極的に紹介し，新たな消費生活のあり方を提言したのが資生堂である。海外の処方箋に基づく基礎化粧品製造のほか，子供服の輸入販売や洋食の提供など西洋文化導入の担い手だった同社が，1970 年代から和の要素を取り入れていった歴史は，日本の消費文化を考えるうえで重要である。そこで，今年度は資生堂と同業者であるカネボウ，コーセー，花王，ライオンなどの資料を収集・整理し，比較分析の材料とした。

昭和に入ってから消費に占める女性の役割が大きくなるため，その潮流を形成した婦人向け雑誌や化粧品・トイレタリー用品・ファッション関連の会社社史，社内報などを収集した。来年度には，それらのデータを整理し，重要な資料について誌面分析をおこなう予定である。

Ｂ班（地方文化の商品化）

Ｂ班ではまず，屋久島の観光業について継続的に現地調査をおこなった。屋久島については林業の隆盛によって形成された集落が廃村に至った経緯と現状の把握に重点をおいた。また，白神山地については，世界遺産登録以前におけるマタギの狩猟採集活動を調査するとともに，古い写真を手がかりに鉱山や林業で栄えたかつての景観と現在の観光された姿を比較考察した。

炭鉱業を中心とした近代化遺産については，景観や生活があまりにも劇的に変化しており，昭和 30～40 年代の状況を復元することさえ困難になっている。なぜなら，閉山後に大規模な再開発がおこなわれ，かつ数多くの転出者があった中で，地元に残った炭鉱労働者も 70～80 歳代に至っているからである。そこで，本研究会では比較的資料が多く残っている福岡県宮若市の貝島炭礦を中心として，炭鉱があったころの生活との文化の復元に重点を置いた。

戦跡関連の資料は昨年度集中的に収集したためか，今年度はあまり良い資料を見つけられなかった。だが，本土復帰前後の沖縄観光に関する資料は本研究会にとって極めて重要であるため，今後も収集と分析に努めていきたい。

〇2012 年度

Ａ班（都市の消費生活）

Ａ班では，今年度も長野県須坂市の田中本

家博物館において，引き続き文書資料の撮影とスキャニング，モノ資料の撮影と計測，目録の作成をおこない，電子データにしてメンバー間で情報を共有化した。さらに，他の百貨店やスーパーマーケットとの比較分析のため，各社のＰＲ誌やカタログ，社史，絵葉書を収集，分析した。その結果，三越が学者や文化人を集めて，江戸らしさや伝統的な民俗を商品の中に取り込み，学問的に権威づけしていった実態を明らかにすることができた。また，同様の手法は，研究の当初から意識していた呉服の元禄模様のみならず，子ども服や教育玩具といったジャンルでも採用されていることが確認できた。

なお，前年度までは呉服や小物類，田中家の消費動向などを中心に調査していたが，今年度は正月用品や節句用品などにも目を向け，それらと食品産業や家庭生活などの関わりに着目した調査をおこなった。正月用品の例えばおせちや供え物について調査するには，百貨店やスーパーマーケット，食品産業に関する資料分析の他に，婦人向け雑誌の誌面分析が有効である。その分析をおこなった結果，明治時代に入って西洋料理に対する日本料理というカテゴリーが確立されていく中で，プロの料理がおせちのメニューを変え，豪華にしていったことや，それによって主婦の家事負担が大きくなったこと，さらにはその負担を軽減するためにおせちの既製品化が進んでいったことなどが明らかになった。

三越と並んで，新たな消費生活のあり方を提言した企業としては，他に化粧品やトイレタリー，下着などの大手メーカーがあげられる。そこで，それらの企業に関するＰＲ誌や社内報，社史などを集めて，分析をおこなった。中でも注目したのは，戦前から西洋風調剤の化粧品製造や子ども服の輸入，洋食の提供など，日本に西洋文化を積極的に紹介した資生堂である。この資生堂には欧化主義のイメージが強いが，一方で日本の伝統美を大切にしてきた側面もある。とくにその傾向は1950 年代と 1970 年代に強くみられる。ただし，そのような傾向と社会的背景との関わりについては，今後の課題としたい。

一方，Ｂ班では，炭鉱業を中心とした近代化遺産，広島や沖縄の戦跡，沖縄イメージの形成，宮崎南国イメージの形成などについて調査した。

炭鉱業といえば，一般に荒々しい気質の炭鉱夫や貧しい生活がイメージされ，それを払拭するために企業や行政がこれまであまり記録を残そうとしてこなかった経緯がある。そこで，元炭坑夫への聞き取り調査の他，社史や労働組合史，労働組合のビラ，労働者による文芸誌などの分析をおこない，小説や映画，写真集で描かれている炭鉱街の様子と比較検討した。その結果，小説や映画，写真集は刺激的なことを寄せ集めた結果，背景としている地域や時代が現実からずれていることが判明した。そのような現実と異なるイメージへの抵抗と，炭礦労働の経験をもつ人々が 80 代にさしかかっていることが，炭礦の記憶を残す大きな動機になっていることも確認できた。

広島と沖縄については，記憶と語りに基づいた平和学習の実践から戦跡保存へ移行した背景について調査をおこなった。基本的に，それは戦争を経験した語り手の高齢化に対応した結果であるが，そのことが地域における戦跡の位置づけをかえ，広島に至っては土産品等の観光資源にまで影響していることがわかった。

さらに，沖縄については戦争の被災地から自然や伝統的な工芸・芸能・食事が豊かなイメージへと移行する過程について調査をおこなった。それは沖縄が抱える様々な矛盾と

関係しており，例えば伝統食と長寿が強調される一方で，アメリカンカルチャーの浸透によって高カロリー食が普及し，肥満化が進んでいることなどに反映している。そのような状況に対しては，観光の現場におけるイメージの切り取り方についてさらに深く追究していく必要を感じている。

○３年間を通じて

本研究課題が試みたのは，ある資源を民俗や歴史を用いて意味の転換を図り，権威づけをする，あるいはそれまでとは異なる使い方をする背景を，おもに商品化と観光化の過程を対象として明らかにすることであった。その対象は，百貨店やスーパーマーケット，食品産業といった各種業界から，世界遺産，近代化遺産，戦跡など多岐にわたった。

ただし，本研究課題は，意味の転換や権威づけによって，民俗や歴史が間違った方向に利用されたことを問題視しているのではない。むしろ，その過程で民俗や歴史の一部が切り取られ，生活の実態と軋轢を起こしてしまうこと，また切り取られたそれらが意外な地域や分野にまで広がりを見せてしまうことに注目した。

そして，その成果は，論文や学会発表，フォーラム等を経て，2013 年 3 月 19 日に開室した国立歴史民俗博物館の第４展示室（民俗）の基礎データにもなっている。だが，三越１社をとっても，まだすべての催事と流行，さらには学問との関係を明らかにできたわけではなく，また近代化遺産についても例えば炭鉱の労働運動で形成されたイメージとの関わりなどはまだ詳細に分析できていない。このため，残った課題は数多く，今後も引き続きこの分野の研究を続けていく必要性を感じている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

①山田慎也，山村調査，海村調査における葬制の位置づけとその目的，国立歴史民俗博物館研究報告，査読有，165 集，2011，265-277
②常光徹，禁忌と制裁―柳田國男が鈴木棠三に求めたもの，国立歴史民俗博物館研究報告，査読有，165 集，2011，279-286
③内田順子，写真・映画の資料化に伴う諸問題，国立歴史民俗博物館研究報告，査読有，168 集，2011，9-31
④内田順子，国立歴史民俗博物館所蔵の北海道沙流川アイヌ風俗写真」，国立歴史民俗博物館研究報告，査読有，168 集，2011，197-263
⑤山田慎也，遺影と死者の人格：葬儀写真集における肖像写真の扱いを通して，国立歴史民俗博物館研究報告，査読有，169 集，2011，137-166
⑥岩淵令治，近世大名家の葬送儀礼と社会，国立歴史民俗博物館研究報告，査読有，169 集，2011，353-428
⑦常光徹，流行病と預言獣，国立歴史民俗博物館研究報告，査読有，174 集，2011，183-200
⑧山田慎也，枕団子と死者の想い，国立歴史民俗博物館研究報告，査読有，174 集，2012，31-42
⑨神野由紀，表象としての少女文化：「カワイイ」デザインの起源に関する一考察，デザイン学研究，査読有，19 巻，2012，28-35
⑩柴崎茂光，世界自然遺産のマネジメントシステムの改善に向けて，森林技術，査読無，841 号，2012，8-12
⑪柴崎茂光，世界遺産の民俗学，歴史研究の最前線，査読無，15 巻，2013，34-56

〔学会発表〕（計 9 件）

①小池淳一，陰陽道と生活文化：東方朔写本考，日本宗教学会第 69 回学術大会，2010 年 9 月 5 日，東洋大学
②青木隆浩，世界自然遺産の保護と観光化の諸問題，総合研究大学院大学学術交流フォーラム，2010 年 11 月 7 日，八重洲ビジネスセンター
③小池淳一，陰陽道における「神話」の意義，日本宗教学会第 70 回学術大会，2011 年 9 月 4 日，関西学院大学
④山田慎也，遺影奉納と死者の追悼 ： 岩手県宮古市のある寺院の事例から，日本宗教学会第 70 回学術大会，2011 年 9 月 4 日，関西学院大学
⑤山田慎也，他，近代化のなかの誕生と死，第 78 回歴博フォーラム，2011 年 10 月 29 日，早稲田大学

⑥青木隆浩，他，地域開発と文化資源，第80回歴博フォーラム，2011年12月3日，国立歴史民俗博物館
⑦内田順子，他，アイヌ文化の伝承，第83回歴博映像フォーラム，2012年2月4日，新宿明治安田生命ホール
⑧常光徹，他，河童とは何か，第84回歴博フォーラム，2012年7月27日，早稲田大学
⑨岩淵令治，他，『江戸』の発見と商品化―大正期の三越の流行創出と受容―，第85回歴博フォーラム，2012年9月15日，国立歴史民俗博物館

〔図書〕（計3件）
①神野由紀，子どもをめぐるデザインと近代，世界思想社，2011，334
②国立歴史民俗博物館，青木隆浩編，地域開発と文化資源，岩田書院，2013，185
③国立歴史民俗博物館，山田慎也編，近代化のなかの誕生と死，岩田書院，2013，249

６．研究組織
(1)研究代表者
常光　徹（TSUNEMITSU TORU）
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：40321541

(2)研究分担者
小池　淳一（KOIKE JUN-ICHI）
国立歴史民俗博物館・研究部・教授
研究者番号：60241452
内田　順子（UCHIDA JUNKO）
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：60321543
青木　隆浩（AOKI TAKAHIRO）
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：70353373
神野　由紀（JIN-NO YUKI）
関東学院大学・人間環境学部・教授
研究者番号：80350560
岩淵　令治（IWABUCHI REIJI）
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：90300681
山田　慎也（YAMADA SHIN-YA）
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：90311133
柴崎　茂光（SHIBASAKI SHIGEMITSU）
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：90345190